

カトリック香里教会 年間第21主日 2021年8月22日

— ヨシュア24・1-2a・15-18b、エフェソ5章・21-32、ヨハネ6章60-69 —

「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」 -中略- このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われた。シモン・ペトロが答えた。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きますでしょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」 -ヨハネ6章-

信仰告白

かつてのモーセやヨシュア、そして、イエスに導かれて信仰を培ってきた民と弟子たちが、指導者亡き後、自立してその信仰を保っていくためには、基盤となる確固とした「信仰告白」が必要でした。それは、人がある目標に向かって努力が持続できるための「動機づけ」となるものだからです。

卑近な例ですが、子供が親を認めるようになるのは、犬が主人を認めるのと同じように、無力なものが自分を保護してくれる「愛された体験」があるからです。それがなければ、人は他に大切にしてくれる、親となるべき対象を探すようになるのです。



ヨルダン川の源流 カイサリア

モーセを引き継いだヨシュアが、亡くなる前に、約束の地「カナン」において民の信仰告白を確認したのも、泉が湧き出るヨルダン川の源流カイサリアに於いて、イエスが十字架に向かう途上で、この世の満足を求めて突き従ってきた無理解な弟子たちの中で、ペトロの信仰告白を確認したのも「動機付け」によって揺るぎない信仰を生きていく覚悟を持たせるためでした。

愛された子供は、愛することが喜びとなる「大人」に成長していきます。愛することが喜びとなった大人が結ばれて、夫婦は至福を味わい、生まれてくる子どもは、夫婦の愛の「おこぼれ」で育つのです。

パウロはこのことを「キリストと私たち教会」の関係にたとえ、互いに与え合い、仕え合う生き方を、キリストから学ぶよう教えます。

私たちがペトロに倣って、動機付けとなる「信仰告白」をイエスに祈りましょう。「主よ、あなたは私を救うためにご自分の命を捨ててくださった方です。無力な私が持つべき親は、主よ、あなただけです。あなた以外のものを親として「不幸」を味わう日が来るようなことはありませんように。あなたに守られ、愛された体験をいつも心に刻んで生きる者としてください。」

2021年8月22日 主任司祭 昌川信雄